(C)新潟日報社 無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

第3種郵便物認可 (日刊) 新潟日報 2023年(令和5年)9月4日(月曜日) 地域 18

グローバルにいがた @世界の街

トルコ・イスタンブール 月曜掲載

経済不安定で問題山積

イスタンブールの人々との会話の中から、トルコの「今」が垣間見えることがあります。

「1日働いてもコーヒー1杯分にしかならないよ」。ボスポラス海峡を結ぶ連絡船の中で、私に声をかけてきた男子高校生の嘆きです。

トルコリラの暴落を受け、トルコ経済は非常に不安定です。私の印象ではここ数年で物価は何倍にも跳ね上がり、庶民の家計を直撃しました。彼の父は外科医ですが、医師でもインフレの影響で「生活は決して楽ではない」と言います。

本間 和寛さん

新潟市西蒲区出身

「トルコのことは大好き。でも将来を考えると他の国で仕事を見つけたい」。こう言っていたのは、日本企業で働きながらトルコの大学で研究を続ける女子学生。彼女の大学は授業が全て英語。そのため、学生は基本的に英語が堪能です。彼女のように修養を積み、グローバルな視点を持っている若者こそ、トルコの現状を憂い、海外へ行きたいと望んでいるようです。

「子どもを公立の幼稚園へ転園させるしかない」と話すのは30代前半の女性です。女性には5歳になる子どもがいるのですが、将来を見通して、英語教育など質の高い教育が受けられる私立の幼稚園に通わせていました。しかし、物価高で保育料が5倍に。到底払えるはずもなく、地元の公立の幼稚園に通わせることにしたと言っていました。「このままだと小学校も公立に通わせるしかない」と、不安げに話してくれました。

トルコでは5月の大統領選挙で現職のエルドアン氏が勝利を収めました。経済不安、トルコ・シリア地震からの復興、ウクライナ問題、欧州連合(EU)との関係など、さまざまな問題が山積しています。

長い歴史と独特の文化を持ち、親切で温かい人々がいるトルコは10月、建国100年を迎えます。私の大好きなこの国の未来が明るいものであることを願わずにはいられません。

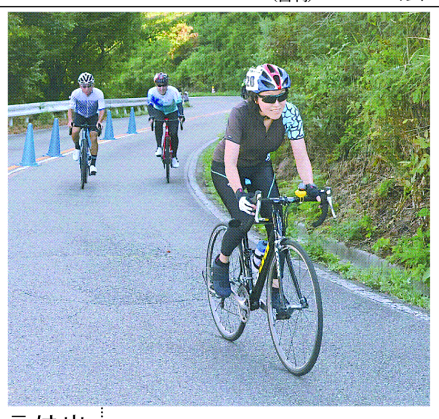
最後になりましたが、新潟日報に掲載された私のトルコ・シリア地震の記事(2月20日付)を読み、温かい励ましの言葉や義援金をトルコへ送っていただいた方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。

(本間さんは1984年生まれ。2010年から新潟市内の小学校教諭として勤務。21年にイスタンブール日本人学校に赴任しました)

海外で暮らす本県関係者が現地の様子を紹介します。ウェブサイト新潟日報デジタルプラスにも掲載。執筆希望も受け付けています。

目指せ頂点 ペダル懸命

弥彦山で自転車レース



山頂を目指して弥彦山スカイラインを駆け上がる自転車レース「新潟ヒルクライム」が3日、開かれた。参加者は荒い息を吐きながら懸命にペダルをこいだ。

山頂を目指して自転車でコースを駆け上がる選手=3日、弥彦山スカイライン

新潟市などが主催し、11回目。タイムレースのヒルクライムと計測なしのファンライドの2種目が行われ、県内外の9歳から78歳まで225人が出走した。

コースの全長は約7・6キロで標高差は520メートル。連続するカーブと急斜面が選手の体力を奪う、難しいコースが特徴だ。

弥彦山山頂駐車場付近のゴールが近づくと、選手は最後の力を振り絞りスパートを仕掛け、顔をしかめながら全力で足を動かしていた。沿道には自転車ファンらが集まり、「あと少し」「追い越せ」などと声援を送った。

家族と参加した福島県いわき市の小学4年阿部ハルヒさん(9)は「ヒルクライムは初参加だった。疲れたけれど、風を体に受けて走るのが気持ちよかった」と笑顔だった。

ウミガメ近い! 長岡・寺泊水族館 親子が餌やり体験

処理した餌をウミガメに与える参加者=3日、長岡市の寺泊水族博物館

水族館で生き物への餌やりなどを体験するイベント「親子わくわく魚ランド『バックヤードツアー』」が3日、長岡市の寺泊水族博物館で開かれた。普段はスタッフしか入れないエリアに立ち入り、餌やりなどを楽しんでいた。

この日は親子3組7人が参加し、水槽の裏側やポンプ室、餌が保管された冷凍庫を見学した。参加者は、慣れない手つきでサバを包丁で処理して餌を作り、水面から頭を出してねだるウミガメに驚きながら、餌を与えた。

父親と参加した長岡市の小学3年、岩本希央(きお)君(8)は「将来、水族館で働きたい。普段は見られない場所を見ることができてとてもよかった」と喜んだ。

体験ツアーは9月10、24日、10月1、8、29日も行われる。午前11時~正午。先着5組で入館料が必要。電話か寺泊水族博物館ホームページの「お問い合わせ」からメールで申し込む。問い合わせは、0258(75)4936。

父の詩 平易に真理歌う

上越・高田文化協会60周年式典 堀口大学の長女が講演

上越市の高田文化協会(藤林陽三会長)の創立60周年記念式典が2日、仲町3の「百年料亭 宇喜世」で開かれた。協会とゆかりある詩人堀口大学の長女すみれ子さんが記念講演し、会員ら約100人が節目を祝った。

協会は1946年、市出身で疎開していた芥川賞作家の小田嶽夫と、藤林会長の祖父道三さんら市民が立ち上げた「上越文化懇話会」が前身。63年に他の文化団体と統合し、高田文化協会が発足した。初代会長は皇后さまの祖父、小和田毅夫さんだった。

式典では藤林会長があいさつし、「高田に疎開していた堀口大学先生には文化人と交流し、高田の文化高揚に努めていただいた」と戦後の活動を振り返った。

講演では、すみれ子さんが両親の思い出について語ったほか、父大学の詩も紹介。「父は生涯、いい詩を書きたい一心で活動していた。平易な言葉で詩の根底にある普遍の真理を歌った」と話した。

写真=高田文化協会の創立60周年記念式典で講演する堀口すみれ子さん=2日、上越市仲町3

脳トレ道場 ワイド

答え ＝問題は11面＝

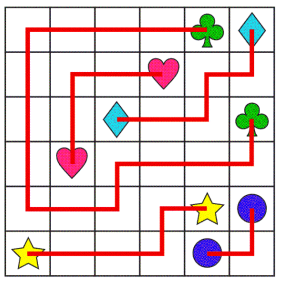
【歴史クロスワード】

ロ	ク	モ	ン	セ	ン
ク	■	ウ	■	キ	■
メ	キ	シ	コ	■	ソ
イ	ヨ	■	コ	モ	ロ
カ	シ	マ	■	ク	モ
ン	■	ソ	ロ	バ	ン

バンシヨウ

晩鐘

【マークリンクパズル】



佐渡物語 <156>

赤神 諒 作

「条件がある。借金帳消しはありがたい話だが、もう少し弾んでくれ」

「たかだか銭にこだわるとはお前も落ちたものじゃな。幾ら要る?」

「三百両だ。俺がここを出る前に、さっきの花魁に届けてやってくれ」

この部屋の主を苦界から解き放ってやるくらいしか、吉大夫にはできない。

「お前も相変わらずじゃな。それで〈凍て剃刀〉を使えるなら安い買い物よ」

無駄話を嫌う彦次郎は「明日中に届けさせる。三日のうちに佐渡へ発て」と言い捨てて立ち上がった。旧友の小さな背に、吉大夫は問うてみた。

「ひとつ、教えてくれ。お鷺は息災か?」

「七年前に流行り病で死んだ。子はない」

「……なぜ、守れなんだ?」

「さだめだ。致し方あるまい」

背を向けたまま振り返らず、彦次郎は部屋を出て行った。

その日の夜、花扇は吉大夫に縋りついて、泣き崩れた。ひとことの礼も言わず、一礼だけして部屋を去った後、花扇が本気で惚れていたのはあんただったんだと、訳知り顔で言う楼主の頬を思い切り一発殴りつけてから、吉大夫は慣れ親しんだ吉原を出た――。

吉大夫は宿根木近くの山道でゆらりと立ち上がった。北前船が碇泊する小木まで、あと半里ほどか。

すっかり泥塗れで情けない格好だが、吉大夫の勘定に狂いがなければ、あの男はそんなことに頓着しないはずだ。

朝の光を浴びる雨に濡れた山道を、吉大夫は再び歩き始めた。

第6章3節

荻原彦次郎は手の中にある短い文を、じっと睨みつけた。

彦殿 佐渡ニ天下ノ大罪アリ 昼七ツ吉祥屋ニテ 吉

誰も真似できない稀に見る達筆は、紛れもなく間瀬吉大夫の筆跡である。与右衛門を経て、平岡から渡されたものだ。

天下の大罪といえば、徳川家への謀叛か、キリシタン禁制か、あるいは……。

人は呆れ返るほど弱い生き物だ。誘惑に負け、追い詰められ、大小の不正を犯す。多少は小悪を見過ごすのも上に立つ者の仕事だと、彦次郎も今では弁えているが、どうやら吉大夫は看過しがたい大罪を突き止めたらしい。

「睨み」
大越菜々香、小林桃花(日本アニメ・マンガ専門学校コミックイラスト科1年、同マンガ・イラスト・キャラクター科2年) =合同制作

デジプラでも読めます